

令和元年度「常盤賞」 - 受賞の喜び -

常盤工業会では、令和2年3月6日に令和元年度「常盤賞」表彰式(第30回)を行い、学業優秀者、課外活動優秀者23名の方を表彰しました。受賞者の皆さんには次の質問の中から3つ答えていただく形で受賞の喜びを語っていただきました。

《質問事項》

- ①工学系で学ぼうと思ったきっかけは何ですか？
- ②山口大学工学部で一番印象に残ったことは何ですか？
- ③(学業優秀者) 在学中にあなたが一番熱中したことは何ですか？
(課外活動優秀者) 活動をはじめたきっかけは何ですか？
- ④(学業優秀者) 勉強をする際に工夫していたこと、心がけていたことは？
(課外活動優秀者) 活動を通して学んだことは何ですか？
- ⑤将来の夢をお聞かせください。
- ⑥(学業優秀院生) 大学院で学ぼうと思ったきっかけは？
- ⑦(学業優秀院生) 研究内容について簡潔に紹介ください。
- ⑧(学業優秀院生) 将来の夢をお聞かせください。





千頭 勇斗 (機械4年)

①将来は規模の大きなものを作ってみたいという漠然とした考えがありました。私の思い描く大きなものが、飛行機や船、ロケットだったという理由から機械工学系の道に進みました。父が工学系の仕事をしている影響も大きいと思います。

②研究室生活だと思います。先輩と一緒に夜通し装置を組んだり、実験を行って発生した問題について議論したり、解析した結果の報告をしたりしました。大変なことも多くありましたが、これまで経験したことのない新鮮なものでした。また、プライベートでも研究室の人たちと食べたり遊んだり充実した時間を過ごしました。

⑤機械工学で四力学を学ぶことです。少しずつ世の中にある機械製品の仕組みが分かるようになってきたところですが、今後もさらに工学的知識を身につけ、世の中をよりよくするための製品開発に携われるような技術者を目指したいと考えています。



秀川 雅昭 (機械4年)

③音楽ゲームです。単なる娯楽ではありますが、上達を目指す上で、体調管理と時間の捻出を真剣に考えた結果、タイムマネジメント能力を磨くことができました。体調を整え、1日のタスクの時間割り振りを事前に考えることにより、毎日の行動の効率が高まったと実感しています。

④心がけというか、性格かと思いますが、聞いた内容や取り組んだ問題に対して、少しでも疑問点があれば自分が納得するまで考えたり調べたりするようにしていました。結果的に、テスト等の応用問題や新規の課題に対する対応力がついたと感じます。

⑤二輪車のブレーキ等の安全装置の制御や姿勢制御の研究開発に携わることです。私は二輪車が大好きで日頃から二輪車に乗っていますが、一瞬の操作ミスで大怪我につながることを常に意識しています。制御装置の研究によって、少しでも交通安全に貢献できればと考えております。



沖村 凌志 (社建4年)

③空いた時間で様々な本を読むことに熱中しました。幅広い知識を得ると同時に、その本に対する自分の意見をもつようになりました。以前はただ漠然と読んでいたことが多かったので、その点では大学4年間で成長できたのではと感じています。特に、ゼミや卒論などにおいて4年間の読書で得たものが発揮できたと思います。

④解答を覚えるくらい何度も繰り返し問題を解くようにしていました。そして、分からない部分は教科書以外からも情報を探して、可能な限り自力で理解するようにしていました。時間をかけて勉強した分、定着しやすかったと思います。また、いつもそばにいた友人たちが優秀であったため、彼らに負けないようにと頑張れたことも大きかったです。

⑤人の役に立つ働きをしていきたいです。



田村 大智 (社建4年)

①ものをつくることで多くの人たちの役に立つことに憧れ、工学系を志望しました。特に社会建設工学科では、私たちの社会の基盤となる大規模な構造物について学べる点に魅力を感じました。

②卒業研究に取り組んだことが最も印象に残っています。4年生になってからは研究室に配属され、ゼミや現場見学等、3年生まで

の座学とは全く異なる経験をしました。中でも卒業研究では、自分なりのアプローチで試行錯誤しながら研究を進めることができたことが非常にいい経験になったと思います。

⑤土木に限らず新しいものや技術に関心があります。新しいものを土木に取り込み、よりスマートになった土木業界を見てみたいです。そのためにも、新たな技術開発に携わられるような仕事がしたいと考えています。



井川 恵祐 (応化4年)

①高校生のときに化学に興味を持ち、より深く学びたいと考え工学系に進学しました。

工学部応用化学科について調べた際に、化学が生活の中にあふれていることに感銘を受けたことを今でも鮮明に覚えています。さらには研究や開発によって医薬品や液晶などが高品質化されるなど無限の可能性を感じました。

②TCB(テクニカルコミュニケーションイングリッシュ)という講義です。英語力はもちろんのこと、他学科の人と話す機会が多く、講義を通じてさまざまな刺激を受けました。自分の学んできた化学について相手にわかりやすく伝える訓練にもなったと思います。

③化学メーカーで研究開発に携わりたいと考えています。そのために大学院に進学してより専門的な知識を学びたいと思っています。



谷戸 謙太 (応化4年)

②研究室に配属されてからの1年間で特に印象に残っています。座学中心の3年までとは異なり、一人一人がテーマ

を与えられ、そのテーマについて自主的に研究を行う日々はとても充実していました。さらに、研究室でのイベントもたくさんあり、

とても楽しい1年間でした。

④心がけていたことは2つあります。1つ目は授業中にノートをとることです。授業中の板書をノートにとることで、テスト勉強の際に見直すことができ、復習になると思います。2つ目はテスト勉強のときに1人で勉強するのではなく、複数人で勉強することです。わからないところを教えあうことで、知識の定着につながると思います。

⑤大学院に進学してさらなる専門知識や研究技術を身につけ、学んだことを生かして製薬企業で研究開発を行いたいと考えています。



加藤 秀一 (電電4年)

①愛知県出身ですが、家の近くにはものづくりの会社が多くあり、子供の頃から何度か見学会に行くうちにものづくりに興味を持つようになりました。また、高校生の時に物理が好きになり、将来はものづくりに関わる仕事がしたいと思い、工学系を学びたいと思いました。

②授業には必ず出席し、板書や先生に重要だと言われた内容はしっかりメモを取りました。また、授業中に理解ができなかった内容は家で復習してわかるようにしていました。授業で出される課題は、なるべく独力で解くようにしていましたが、解けなかった時は、友達と協力して行うことで理解を深めていました。テスト前にはメモを参考に復習をしてテストに臨んでいました。

④授業には必ず出席し、板書や先生に重要だと言われた内容はしっかりメモを取りました。また、授業中に理解ができなかった内容は家で復習してわかるようにしていました。授業で出される課題は、なるべく独力で解くようにしていましたが、解けなかった時は、友達と協力して行うことで理解を深めていました。テスト前にはメモを参考に復習をしてテストに臨んでいました。

⑤現在、制御および情報工学の研究を行っています。自分が行っている研究に非常に興味があるので、将来は大学で身につけた知識を活かせる企業に就職したいと思っています。



宮城 詢 (電電4年)

②4年になって研究室に配属されてからの1年が最も印象に残りました。夏頃まではゼミで研究に必要な知識を学びました。分からないところは本で調べたり、研究室の同級生や先輩方と共に考えて理解を深めていきました。先輩と共同で研究をしていたので、先輩に教えていただきながら進めていきましたが、徐々に自力でプログラムを作れるようになりました。この1年の経験を今後の研究に活かしていきたいと思っています。

③サークルで友人や先輩たちとスポーツをして体を動かしていました。試合形式でやることもあったので実践的でとても刺激になりました。夏には合宿にも参加し、普段とは違った場所で友人や先輩方と過ごすことができ、貴重な経験になりました。

④授業の課題や実験レポートは、その日学んだことを忘れないように早めに終わらせていました。試験の2週間前には試験勉強に取りかかるようにしていました。配布資料や参考書を見たり、友人と相談したりしながら勉強することで、苦手な問題を減らし、応用的な問題を解けるようにしました。



川津 友輔 (知情4年)

①大きなきっかけはないのですがモノづくりに関して興味があり、何かしらの技術や技能を身につけることに憧れがありました。いろいろあって情報系の分野に進んだのですが、興味があることができていたのでよかったと思っています。

③卒論で作成したプログラム作りだと思いません。それまでは、はじめから自分で問題を考えてプログラムを組むという経験はなかったのですが、卒論では自分でテーマを設定し、

それに向かってプログラムを組んでいくという経験をしました。毎日改良しながら目的のモノを作り上げるのはとても楽しかったです。

④考え方を理解することを心がけました。もともと何かをそのまま暗記するより物事の原因や仕組みを理解することのほうが好きなので、講義中もなぜそうなるのかを考えながら受講し勉強しました。



喜多 尚輝 (知情4年)

①高校時代、AI(人工知能)の発展が目覚ましく、簡単な仕事はロボット等が人にとって代わるようになるのではと危機感を覚えました。それがきっかけとなり、AIの仕組みを知って正しく扱えるようになりたいと思い、知能情報工学科を希望しました。

③「enPiT」です。enPiTでは、最初にアジャイル開発について学び、それを用いて数人でチームを組んでアプリケーション開発に勤めました。そして作ったアプリを企業の方に見てもらい批評していただくという貴重な経験をさせていただきました。このことから、アプリ1つにしても数か月の製作期間が必要なことや、ニーズを明確にすることなどアプリ開発の大変さを実感しました。

④1人で勉強した後に、友達と勉強内容を話し合っていました。自分がわかるところは友達に教え、自分がわからないところは友達に教えてもらうといった勉強の仕方をしていました。



南 志侑人 (感性4年)

②学会に参加したことです。学会で発表するという貴重な経験を積むことができ、李先生にはとても感謝しています。

また、初めて北陸地方を訪れる機会にも恵まれ、ゼミの友達や先輩方と一緒に観光することで仲を深めることができました。

③英語の勉強です。卒業後は海外に進学したいと思っていたので、英語の学習に一番力を入れて取り組みました。特に、卒業論文を英語で書いたことはとても勉強になり、とてもいい経験になりました。

④授業中に全て理解するよう心がけていました。得意科目でないものは特に、授業外では勉強しなくていいぐらいの気持ちで集中して取り組むようにしていました。また、授業の時は誰にも邪魔されずに集中できるよう、一番前の席に座るよう心がけていました。



高村 友美 (感性4年)

①幼い頃からものづくりが好きで、自分の手で何かを創り上げることに大きな興味がありました。そうした中、両親

の知人の建築士の方にお会いしたことがきっかけで建築に興味を持つようになり、工学系に進むことを決めました。

④当たり前のことですが、毎回必ず授業に出席することです。板書だけでなく先生方のコメントも書いておくことで、授業の様子と合わせて内容を思い出しやすくなります。また、私自身学んだことをすぐに吸収できる方ではないので、自分の中で噛み砕きながら時間をかけて理解していくことを心がけていました。

⑤働く人の空間づくりに携われる仕事に従事したいと考えています。働き方や生活環境が大きく変化している今の時代に沿った、既存

の在り方にとらわれない提案ができる人になりたいと思います。在学中に得た知識や経験を活かして、少しでもどこかの誰かの生活に役立つ仕事ができれば幸いです。



石田 晶子 (循環4年)

①昔から数学や物理が得意であったため、高校1年生のときから理系分野に進もうと考えていました。工学系で学ぼうと焦点を当てたのは、自然豊かな山口の環境に囲まれて育ち、将来は水の流れや処理方法について学んでいきたいと思ったのが、一番のきっかけです。

③常盤祭実行委員会に所属して、大学祭という大きなイベントに携わることができたことです。多くの人たちが大学祭に足を運んでくださり、地域の方との繋がり大切さを知るいい機会になりました。また全体の運営の大変さ等も学ぶことができ、自身の成長にも繋がりました。

⑤地域住民の方に寄り添い、共に町づくりへと発展していけるような手助けを土木職員として行っていくことです。大学時代に学んだ分野や、サークル活動で培ったコミュニケーション能力を十分に生かし、地域へ貢献していくことを目標に、毎日取り組んでいきたいです。



大久保早瑛 (循環4年)

①高校時代、数学と物理学が得意であったことに加えて、工学部は就職先の候補を幅広く持てること、就職において優位性があるということから工学部に進学しました。

②研究室に所属されてから、いかに自主性が必要とされるかを体感しました。3年次まで

は授業を聞くという受け身の姿勢であることが多いですが、4年次からは研究内容や研究方法も自ら考え、行き詰まった時は自主的に質問や相談をし、論文を作りあげました。そしてこれらの経験を通して、自主性に加えて、自分の考えや行動に自信を持つことができるようになりました。

④板書を写す際、先生のコメントもメモしていました。また、自分一人では情報を聞き漏らしてしまっていたり、理解するのが難しい問題も出てくるので、友達と情報をシェアしたり、分からない問題を教え合ったりしていました。それでも分からない問題は、先生に直接質問をして疑問を解消していました。



濱田 柔久

(院機械工学系専攻2年)

⑥研究活動自体に興味があったことと、“自分がどのように生きていくか”を考える上で、学部就職よりも、大学院での経験がヒントになるのではないかと考えたからです。

⑦宇宙機の熱防御設計には、宇宙空間の加熱環境を模擬できるアーク風洞が使用されます。その際に重要となるのが、宇宙機がどれくらいの加熱を受けるかです。しかし、現在の課題として、この装置を用いた試験の際、宇宙機周りの加熱環境を表す指標の1つであるエンタルピ（熱が持つエネルギー）の正確な計測方法が確立されていません。過去、アメリカの研究では、宇宙機周りに形成された衝撃波層内の光を計測することでエンタルピを計測する方法が確立されました。しかし、日本のアーク風洞は設備の制限による出力の限界から、宇宙機周りの衝撃層が小さくなるので、光の計測が困難となります。そこで、私の研究では、磁石の力で衝撃層を拡大させることで、正確なエンタルピ計測法の実現を目的と

しています。

⑧飽きるまで知らないことを吸収して、美味しいご飯をたくさん食べたいです。



山口 皓平

(院建設環境系専攻2年)

⑥学部4年から取り組んだ自分の卒業研究である環境DNAに関する研究と、それに関する水理学や河川工学、生態学などについて、より知識を深めたいと考えたため、文献の閲読や学会へ参加する機会を数多く得ることができる大学院に進みたいと考えました。

⑦河川等の環境水中に存在する生物のDNAの情報を調べることで、対象生物の生息状況を把握する環境DNA分析手法について、DNAの検出元となる排出物に着目し、その物理的動態を追跡することで、実際の河川中での環境DNAの動態を把握することを目的とした研究です。

⑧コンサルタントで実務を通じて、河川管理や生態系管理に関することをより密接な視点から学びたいです。また、大学や実務で培った知識や経験を活かし、河川をはじめとした水圏の生態系管理について、どのような水域でも応用可能な汎用性のあるモニタリング手法や評価方法の開発検討に携わることができるよう精進してまいります。



吉岡 励

(院建設環境系専攻2年)

⑥学部生の頃、宇宙開発に建築分野の研究者として携わりたいと考えていました。今、私が所属している研究室では、SPH法という宇宙分野でも用いられている解析手法を使用した研究を行っていたため、この解析手法を学びたいと思ったことがきっかけです。

⑦現状のコンクリートの打設は、施工者の経験に依存しているため、充填緻密性の信頼性はなく、コンクリート挙動を定量的に評価できないため、将来の建築施工の自動化で問題となります。この解決策は、施工性の合理的評価方法の確立や打設シミュレーションによるコンクリート施工性と施工方法の最適化です。これに関連して、私の研究は、コンクリート流動時の材料の分離傾向を推定する解析方法の確立を行うというものです。

⑧高齢者になっても高い好奇心を保持して、特定の分野にとらわれず、幅広い知識を身につけながら、未だ確立されていないビジネスを創出して、社会や人が抱える問題を解決していくことです。



平町 雄一
(院化学系専攻2年)

⑥今思えば、「1つのことにのめり込んで研究した経験は、社会人になっても必ず役に立つ。」と学部生の頃に参加したインターンシップ先のエンジニアの方に教えていただいたことがきっかけだと思います。大学院に進学し、その時扱っていた研究テーマについて深く知りたいと考えました。

⑦近年、環境にやさしいクリーンなエネルギーとして注目されている「水素」を太陽光と水から製造できる「光触媒」と呼ばれる金属材料について研究しています。この光触媒が太陽光照射下で効率よく機能することができれば持続可能な水から水素を製造する方法を構築できます。実用化に向けて、光触媒の高機能化を目的とした実験をしています。

⑧一人前の技術者になることです。どのような分野であっても、その分野であれば、平町に聞けばわかる、と頼られるような技術者になりたいと考えています。



吉高 京華
(院化学系専攻2年)

⑥じっくりと研究に取り組み、さらに専門性を高めたいと思い大学院へ進学しました。研究することが好きで、日々研究に励むことが楽しく、非常に有意義な時間でした。成果を発表する学会では、意見交換を通して様々な知識を得ることができました。また、一人の研究者として成長することができたと感じています。

⑦脳疾患治療薬の投与技術の開発に取り組みました。現在、薬は脳内にほとんど運ばず、確実に運ぶ方法は手術のみです。手術は患者の負担が大きく、簡単に投与できません。そこで投与技術を確立すべく、鼻腔奥の粘膜から脳へ運ぶルートに注目し研究を行いました。

⑧技術者として、柔軟な発想力を活かし、広い視野をもって私にしかできない仕事をすることです。大学・大学院の研究を通して得られた課題解決力や考え方、技術を軸に、社会のどこかで誰かの役に立ち、感謝されるような人でありたいと思います。



野田優利奈
(院電気電子情報系専攻2年)

⑥より専門的な知識や技術を学びたかったからです。また、学会での発表や課外活動などを通して、学部生ではできない経験ができると考え、大学院へ進学しました。

⑦超伝導の分野の研究を行っている研究室に所属していました。現在、超伝導技術は医療用MRIやリニアモーターカーなどに応用されています。私は、今後幅広い分野での応用が期待されている酸化物超伝導線材を用いてコイルを設計する場合に、線材の特性を十分に活かすためのコイルの構成や配置に関する研

究を行いました。

⑧半導体の開発や生産を行っている企業に就職が決まっています。カメラやスマートフォンなど、現代の生活には欠かせない製品に用いられている半導体の開発や生産に携わり、多くの人の生活の役に立てる技術者になりたいと考えています。



勝木 龍太

(院電気電子情報系専攻2年)

⑥授業を通してより深い知識を身につけることができるのはもちろんですが、尊敬できる先輩や教授と親密に接することができる環境が自身の成長に繋がると感じたため大学院で学ぼうと考えました。

⑦衛星画像の一種である合成開口レーダ画像から、Deep Learningを用いて土砂災害領域を検出する研究を行いました。その結果、従来行われてきたような閾値を用いた検出よりも、提案したDeep Learningを用いた手法による検出が高い性能を示しました。また、Deep Learningによって土砂災害領域の汎用的な特徴を抽出し、学習に使用していない土砂災害地域の検出も可能にしました。

⑧「災害によるリスクのない世界をつくること」です。現在、衛星画像解析に携わることができる企業に内定をいただいております。宇宙データなどを活用しながら将来の夢を達成できるようなシステムの開発に邁進したいと考えています。



伊藤 誠基 (電電4年)

(数学統一試験成績優秀)

①電気系で学ぼうと思ったきっかけは、資格取得の勉強などを通して、電気系統の仕組みに興味を覚えたことです。

②やはり卒業研究です。未知の内容について、手探りで進めていく感覚や、あるいは同じ研究室の学生の研究に首を突っ込むといった経験は、今後の人生においても大きな意味を持つと思います。

④学習内容によって、柔軟に勉強スタイルを変えることです。そして、理解が重要な内容ならば、授業などの限られた時間の中で、深い部分まで理解できるよう心がけました。また、授業が終わった後も、他者に教える機会や学生実験などを利用して、一度理解した知識の定着に努めました。

上田 義治 (応化3年)

(常盤祭実行委員長)

③実行委員会に入れば“茶話会等でタダでご飯を食べれる”という安易な気持ちがきっかけで始めたのですが、話を聞いていくうちに興味を持つようになり、これまで経験したことのないことをやってみようと思うようになりました。

④常盤祭当日は自分も他の委員もとても楽しんでいましたが、その日に至るまでのことを考えるとやはり大変な苦労がありました。人の上にたって組織をまとめていくことの難しさをあらためて学びました。

⑤大学に入って3年経ちますが、まだこれというはっきりした夢はもっていません。これから研究室に配属となってまた新しい気持ちでいろいろなことにチャレンジしていきたいと思っています。